

特集「コラボレーション支援」の編集にあたって

岡田 謙 一†

人間の協調活動を支援するシステム「グループウェア」が社会的に認知されるようになってから10年の歳月が流れた。この間におけるパソコンそしてインターネットの普及は想像を超えるものであり、今やコンピュータネットワークは社会生活をおくる上で必要不可欠なインフラストラクチャとなった。また、数年前に情報処理学会誌に寄稿した「グループウェアの未来」という解説記事の中で、やがてほとんどのアプリケーションはグループウェアとしての機能を持つと指摘したが、現在、市販のアプリケーションにおいてコミュニケーション機能や情報共有機能が備わっている事はそれほど目新しい事ではなくなった。

ネットワークインフラストラクチャの整備とともにグループウェアは実用期に入ってきたが、グループウェアの研究もますますさかんにになっており、この分野で最も重要な国際会議である CSCW では毎回600人以上の参加者を集め、熱気のある議論が行われている。本学会でもグループウェア研究会が4回/年の研究会を開催し、最新の研究発表を行っている。CWCW (Computer-Suported Cooperative Work) の研究においては、技術的側面、人間的側面、社会的側面を多角的に検討しなければならない。本学会として最も関連の深い技術的側面に注目すると、グループウェアを支える基本技術はネットワークコンピューティングとコンピュータヒューマンインタラクションである。そこでグループウェア研究会では、マルチメディア通信と分散処理研究会、モバイルコンピューティング研究会とともに DICOMO を、ヒューマンインタフェース研究会、情報メディア研究会とともに INTERACTION というシンポジウムを年1回開催しており、どちらも200人以上の参加者を集めている。

本特集号は、これらの国際会議、研究会、シンポジウムで発表された研究を論文として完成させ迅速に公刊する事を目指したもので、昨年の特集「分散協調支援とその応用」に続きグループウェア研究会が中心となって企画・編集した。本特集号を編集するにあたり、グループウェア研究会で活躍している8人の連絡委員が編集委員として選定され特集号編集委員会を構成した。論文募集に対して41件の投稿があり、各編集委員はメタレビューとして平均5件の論文を担当した。41件の投稿論文に対してそれぞれの担当メタレビューが中心となり、専門に近いことと組織が異なることを基準にして2人ずつの査読者を編集委員会において決定した。査読者の判断が別れたものも数件生じたが、論文の優れた点を積極的に評価するという編集方針に基づき、著者照会および査読者への問合せを通じたメタレビューの適切な判断で採録あるいは不採録が迅速に決定され、当初予定どおり11月号としての刊行となった。論文募集締切りからわずか8カ月弱であり、著者の強い要求である即応性にも十分対処できたと思

えられる。

本特集号には、グループウェアインタフェース、情報共有、非同期型グループウェア、協調学習支援、アウェアネス、グループウェアツールキットなど幅広い分野の論文が投稿された。グループウェアは多人数で使うというシステムの特性上、評価が困難であるとともにきわめて時間がかかるため、数年前までは新しいシステムを作りましたという論文が多かったが、投稿された論文を見る限り評価に重点をおいている論文が次第に増加しているように感じられる。グループウェアが実用期に入り、機能的な目新しさよりも使いやすさに重点がおかれてきたと推察される。ここ10年間におけるグループウェアの投稿論文の傾向をサーベイすると非常に興味深い結果になるであろう。

ゲストエディタという大役を仰せつかったこと、また論文誌編集副査の立場からこの機会にゲストエディタ制度に対する私見を述べたい。最近ゲストエディタ制による特集号が毎月のように刊行されることや研究会論文誌との関係からゲストエディタ制に批判的なご意見も伺う。しかし情報処理分野の発展を願うものとして言わせていただければ、情報処理分野の論文数は他の分野と比較して非常に少ないといわれており、多様な論文発表の機会があることはきわめて重要である。統計データ上からも一般投稿論文の数は減少しておらず、特集号により潜在化していた論文が投稿された可能性が極めて高いと考えられる。また、特定分野の専門家がメタレビューや査読者になるため採録論文が均質化され、なおかつ従来と比較してきわめて短時間で査読が完了する。さらに、特集号から研究会論文誌へと繋げていく可能性もある。したがってこの制度は情報処理学会論文誌の発展にきわめて有効に働くのではないだろうか。

最後に本特集号を刊行するにあたり、多数の優れた論文を投稿していただいた方々、短期間で査読をするためにご尽力をいただいた査読者各位、そしてメタレビューと編集に多くの時間をさいていただいた編集委員の皆様へ深く感謝する。

なお、本特集はゲストエディタ制度により、以下の特集編集委員会の責任で編集を行った。

「コラボレーション支援」特集編集委員会

- 委員長
岡田謙一（慶應義塾大学）
- 幹事
星 徹（日立）
- 編集委員（50音順）
清末佛之（NTT）、桑名栄二（NTT コミュニケーションズ）、垂水浩幸（京都大学）、中小路久美代（SRA/奈良先端大）、坂内祐一（キヤノン）、宗森純（和歌山大学）

† 慶應義塾大学